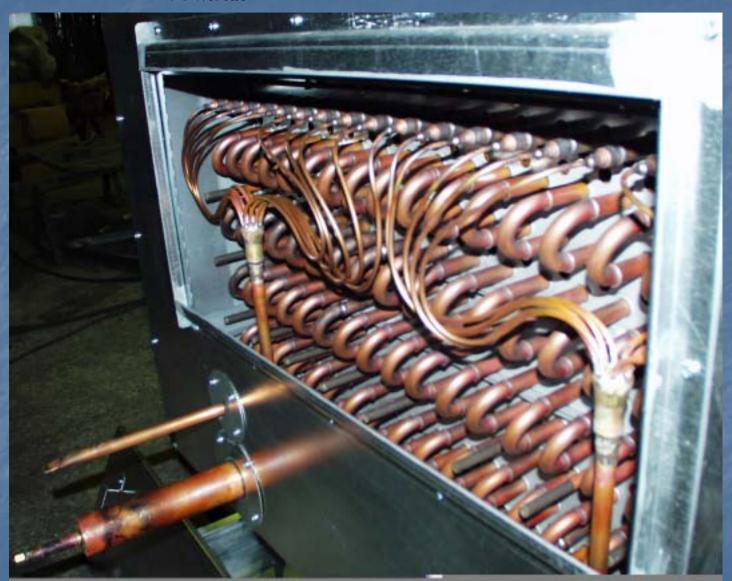
# 環境にやさしいコールドチェーン を支える冷凍システムとは

(冷凍システムの凝縮圧力の最適化制御と蒸発器における 小さい温度差による運用の有効性について)

### ユニットクーラ(蒸発器)



### ユニットクーラ分流器



### 冷凍・冷蔵技術の現状

- 1.ユニットクーラにおける温度差TDを小さく運用することができない。
  - ・大きな伝熱面積 = 多回路への冷媒コントロール技術が確立されていない。
  - ・沸騰熱伝達特性より伝熱面積の拡大が必要、回路数が増えることで 一回路あたりの冷媒流量の減少、二相流冷媒の多回路への均等分流が さらに困難となる
- 2.冷凍機の凝縮圧力を制限している。
  - ・凝縮圧力を下げてしまうと冷媒液温度が下がり、分流器手前のガス量減少にともなう流体速度の低下し、冷媒分流が不均等になることで吸入圧力の低下、さらには液バック現象による冷凍機の損傷を防ぐため冷凍機メーカーは凝縮圧力制限を余儀なくされていた。
- 3.ユニットクーラ等の機器能力が正しく表示されていない。
  - ・沸騰熱伝達を利用した伝熱作用にもかかわらず、温度差に比例した能力値が表示されている。このため小さい温度差での運用は不可能。
- 4. 自然冷媒が注目されているが、本質はランニングにおける炭酸ガス排出 量の削減が重要である。
  - ・NH3とCO2などの二次冷媒を使用したシステムが提案されているが、二度の熱交換が 必要になるなど、効率面から秀でているとは言い難い。

### 経験則からの脱却

#### 1.理論的な解明による対応策の研究

- 1)小さいTDでの運転
- ・ユニットクーラの冷凍能力を実測値に基づき数値化することで、小さい温度差の運転を実現した。
  - 2)低凝縮圧力での運転
- ・ユニットクーラにおける冷媒分流の/ス゚ルとチューブの能力を数値化することで 少ない流量においての均等分流を可能にした。

#### 2.システムおよび機器能力の数値化

·精度向上のための max Refrigeration systemアルゴリズムを開発し、再現性かつ汎用性のあるシステム設計を可能にした。

#### 3.低凝縮圧力運転を行うために制御システムを開発

・tk optimizer(凝縮圧力最適化デバイス)によるシステム能力の最適化を実現した。

# 新しい冷凍システムの開発(1)

### 1.TD(庫内温度と蒸発温度の差)が小さい運転による効果

#### 1) COPの向上

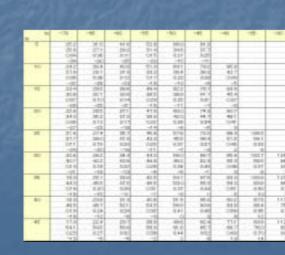
高い吸入圧力で運転を可能とすることで冷凍機単体のCOPを高く運用する。これは冷凍機の選定において小型の冷凍機で大きな冷凍能力を得られる (TD = 15 とTD=5 では、例えば75kWから55kW冷凍機を選定できる)

#### 2)着霜抑制

冷凍能力減少を防ぎ、安定した運用が可能になる

#### 3) デフロスト抑制

着霜抑制によりデフロスト抑制が可能 デフロスト熱漏洩による熱負荷上昇を抑制



## 新しい冷凍システムの開発(1)

4)収納製品の劣化防止

室温と製品温度との差が少ないことによる昇華抑制効果 昇華抑制による製品劣化現象である酸化を防止

- 5) 小さいTDによる使用温度範囲の拡大
  - 二元冷凍領域で二段機の使用が可能となり、同時に-60 の室温で
  - 二元冷凍システム以上の高効率運転が可能

### 新しい冷凍システムの開発(2)

#### 2.凝縮温度を低くした運転による効果

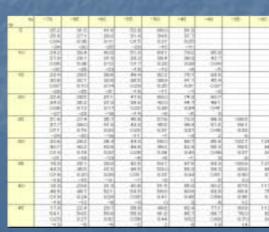
1)低凝縮運転の効果

冷凍機の特性上、凝縮温度が低いと次の事が言える。

(同一蒸発温度における冷却能力および消費電力の関係)

冷却能力 : 凝縮温度が低いほど、冷凍能力が大きくなる(冷凍機の体積効率 ∨の向上、液温度低下により冷凍効果が大きくなる)

消費電力: 凝縮温度が低いほど、冷凍機の運転入力が小さくなる。(圧縮比の小さくなる)



# 【 max Refrigeration System】について

Eta max Refrigeration System

- ■【emRS】によるシステム選定
  - ・実際の運転状態を考慮したシミュレーションソフト 各装置の能力を数値化(機器能力を網羅) 設置および使用状況の入力 アルゴリズムによる計算
  - ・シミュレーションソフトを使用してシステム選定を行う 冷凍機 / ユニットクーラ / 配管 / 弁 / ディストリビュータ 運転における詳細データも作成可能 熱負荷/冷凍能力/予想TD/デフor運転時間/電力量/単体COP等

# 【tk optimizer】について(1)

### ■凝縮圧力最適化装置(tk optimizer)による制御

[tk optimizer]の仕組み ・センサーによるシステム運転情報収集から 最適凝縮圧力制御

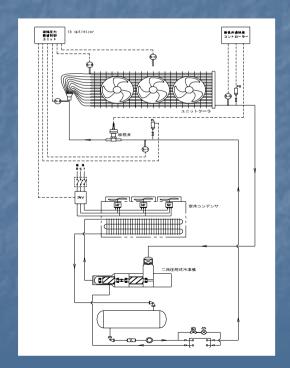
S-1 = 膨張弁手前液温度

S-3 = 冷媒蒸発温度

この2点の情報から冷凍能力 oを求め、 必要となる圧力降下量を演算する

P!=膨張弁手前液圧力を実測し、演算結果の圧力値と比較し圧力制御装置へ出力する

戻る

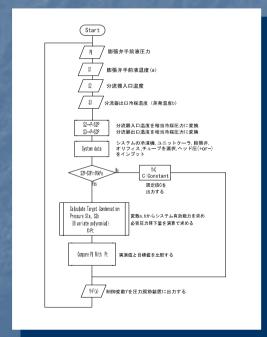


センサ取付け概要図

# 【tk optimizer】について(2)

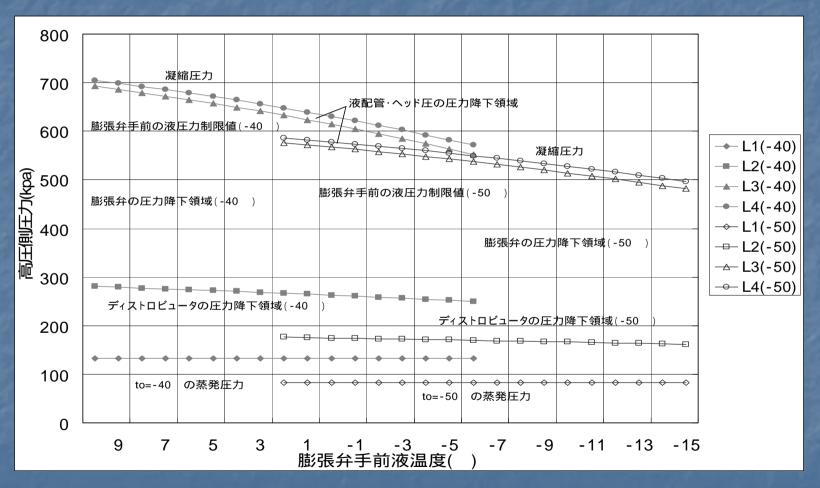
- 1.収集データから冷凍能力を求める。
- 2.液温度から二相流冷媒の分流器における圧力降下量を求める。
- 3.分流可能かを算出し実測値と比較しながら、凝縮温度を積極的に下げて運用する。 (このときシステム条件により数値化されたデータを使用する)
  - ・コンデンサによる凝縮圧力制御 [空冷の場合]: インバータによるファン回転制御

[水冷の場合]: <u>循環水量およ</u>び水温調節



tk optimizer制御フローチャート

# 【tk optimizer】について(3)



to=-40 と-50 の高圧側圧力降下を表した図

# 【tk optimizer】について(4)

室温	- 40	- 30
外気温 (札幌1月の平均気 温)	- 4.1	- 4.1
冷凍能力o	79.1 k W	103.4 k W
蒸発温度(to) 相当圧力abs	- 46.2 ( 100 k Pa )	- 38 (145 k <u>Pa</u> )
液温度(tl)	- 13.3	- 2
ディストリビュータオリフィ ス	n - 33	n - 33
チューブ内径	4.826mm	4.826mm
チューブ長さ	800mm	800mm
回路数	24 ( 1/3台 分 )	24 ( 1/3台 分 )
オリフィス圧力降下	57 k Pa	98 k Pa
チューブ圧力降下	25 k Pa	34 k Pa
ディストリビュータ圧力降下 の合計必要圧力降下量	82 k Pa	132 k Pa
膨張弁の圧力降下	426 k Pa	532 k Pa
液配管の圧力損失およびヘッ ド圧	13 k Pa	20 k Pa
凝縮圧力目標制御値(絶対圧 力)	621 k Pa ( abs )	829Pa (abs)

# 【emRS】の効果(実績1)

■【emRS】による凍結装置 ・急速凍結(エアブラスト方式)による製品の高品質化

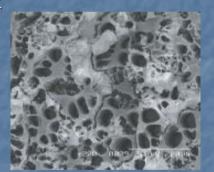
最大氷結晶生成帯通過時間短縮により細胞破壊減少

筋細胞の凍結像(マグロ)

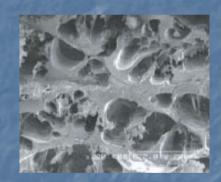
資料提供:北海道立食品加工研究センター

従来型凍結装置

(-38)



[emRS] による凍結装置 (-70 )



国土交通省北海道開発局による2006年度「北海道農水産品高度生産流通システム検討調査」において、新冷凍技術として参画し新しいコールドチェーンの一翼を担う装置として報告されました。

# 【emRS】の効果(実績2)

### 【emRS】による冷凍装置

### ·運転実績比較表

設置場所 群馬県伊勢崎市 入庫品 凍結品

冷凍機 既存・新設共に三菱電機製 SFA-90A2×4台

庫内温度 -31 冷媒 R22

一般的な設備 本システム 収容トン数 12400トン 13100トン 12 ~ 15 ユニットクーラ側温度差TD 5~6 同一条件 入出庫量 同一条件 換気回数 同一条件 同一条件 デフロスト回数 5日に1度 30日に1度 年間総電力量比率 100 68

一般設備と本システムの運用実績を比較すると、デフロスト回数が1/6に減少し、総電力量が32%減少した。

## シミュレーションソフト(1)

#### ■【emRS】シミュレーションソフトの開発

- ・凝縮圧力最適化制御と小さいTDによる運用の個別の効果と技術的対応方法を構築することで、構成機器の能力表から関係するアルゴリズムを組み立て、定量的なシミュレーションの実行が可能となった。
- ・冷蔵庫の設計において負荷計算・機器選定・配管能力の平衡能力計算をおこなう 設計支援と運用地における運転シミュレーションを同時に行うソフトウェアを開発 した。(システム設計ソフト)
- ・運用地の月ごとの浸入熱と冷凍システム能力を時系列に算定し、当システムと一般的な設備の年間運転シミュレーションを行い、その効果を比較可能なソフトウェアを開発した。(ランニングコストシミュレーションソフト)

### おわりに

- 【emRS】は、製品の高品質化および設備の省エネルギー化を実現する、 新しい冷凍システムと言える。
- この技術は、機器の能力を数値化することで、あらゆる冷凍システムに応用が可能である。今後は、寒冷地におけるヒートポンプの開発が期待される。
- 最後に、本システムの開発にあたり、低凝縮能力表や専用コンデンシングユニットの開発などご協力いただいた三菱電機㈱殿に深く感謝いたします。